

# 大学5年生の心壊論

しづめそら

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

彼女は今日も世界に生かされている。

目次

## 大学5年生の心壊論

朝が来ると、今日も生きてしまっている事実には憂鬱になる。カーテンの隙間から早朝の柔らかい陽光が漏れ出している。スマートフォンを着けて時間を確認すると5時42分だった。昨日は2時半くらいに寝たから、今日は比較的よく寝られたと思う。頭の重さはいつも通りで、もはやなんの痛みかもわからない。ただ、私はこの痛みに殺されることはないし、治ることもないのだと知っている。いつかこの痛みにも慣れてしまつて、それでも気がつかずに痛みに耐え続けて、脳が焼き切れて死んでしまえるのだろうか。もしそうなら、私はこの痛みを感じるために存在できるのかもしれない。

「はあ」

Twitterのタイムラインはいつも通り。死にたい、生きてい、最悪、幸せ。相反する感情が次から次へと流れ込んできて、気が狂いそう。私は幸せか？この人ほど不幸ではない。この人は生き方が違う。こうして私の下と上を見定めて生存を確認している。くだらない。それでも私が私でいるためにはこれしかないのだ。生きたくないけど死にたくもない私の存在証明になつてくれ。

スマートフォンを枕元において、長いため息をつく。大学は9時から1時限目が始まる。今日が第8講目、いよいよ折り返し地点だ。体が鉛のように重い。今日も休んでしまいたいが、既に講義を3回休んでしまっている私は、もう気軽に休めない。体を起こして、ベッドの端に腰をかける。項垂れた首が健全な思考を妨げる。

また今日が始まる。頭が痛いのに、体が重いのに、目眩がするのには、私はまだ世界に生かされている。また今日も生きなければならぬ。そう思うと涙が溢れる。

「うぐっ……う……」

大学が嫌い。ひとりぼっちが淘汰されるから嫌い。自主性に頼っているから嫌い。多くの人に囲まれているから嫌い。難しい話ばかり聞くことになるから嫌い。課題に追われるのが嫌い。嫌いなことならいくらでも浮かぶ。大学を卒業したら今よりも辛い現実に向か

うことになるのだ。死ねないのに。ずっと殺されるような辛い日々を生きることになるのだ。

毎日ミスをして怒られるのだろう。バイトを始めて4日で、使えないやつ認定されて後ろ指さされたあの日のように。

「うつつ………!!」

胃液がせり上がってくるのを感じて洗面所に飛び込む。幾度となく吐き戻してきたが、食道を逆流するこの感覚に慣れることができない。吐き出されるものはない。ただ胃液と嗚咽感だけが押し上げられ、ただただ苦しい。

顔を上げると目元に大きな隈をつくった人が鏡に映っていた。

「酷い顔……」

いつからこんなことになってしまったのだろう。大学受験の時は将来を夢見て必死に頑張っていたし、入学直後も保育園教諭を目指して必死に頑張っていたはず。気がつくともんなことになってしまった。チャームポイントだと思っていた笑窪も、とても気分が悪い。

「どうして……」

私は私を嫌いになってしまったんだろう。

現実逃避のためには、うずくまって咽び泣くことしかできなかった。

しばらくしやがみ込んでいたら、少しずつ落ち着いてきた。泣くためにエネルギーを消費して、頭痛がひどくなった気がする。脳を、体を刺激しないようにゆっくりと動いて、冷蔵庫を開く。オレンジ色に照らされた庫内に食べ物はほとんどない。少しのチョコレートと水と薬だけ。薬を取り出して一錠口に含む。これが私のルーティンであり、生きるために必要な行動。飲み込めば心が軽くなる。それと同時に薬を服用している自分自身が情けなくなる。それでもほんの少しだけ生きていていい気がするから、縋りつくように薬を飲み込んでいる。

カーテンの隙間から漏れる光が気になって恐る恐る外を覗く。5階の窓からは辺りがよく見える。ベランダからの転落を防止する柵の前に椅子が置かれている。これはいつでも私を辞められるように、

いつかの私が置いたもの。何度も登って、ベランダの縁に足をかけては、勇気が足りなくて椅子から降りている。今日なら行けるはず。飛べるはずもないのに毎日思って、泡のように消える。死ぬための勇気もないのに、生きるための努力もできないのだから、救いようがない。

こんな日々が、いつまで続くのだろうか。いつまで続けたらいいのだろうか。いつになったら死ぬのだろうか。いつになったら死ぬ勇気が得られるのだろうか。

「うう……うああ……あああああ」

涙がポロポロ溢れる。昔に戻りたい。戻ったら何かできるのだろうか。戻ったところで何もできないのに。私には何もない。死ぬ勇気すら持ち合わせていない。

もう立ち上がることもできなかった。

今日も大学に行かなかった。また私は、私の自尊心を壊して生きていく。

現実逃避の夢の中では、上手に死ぬる方法を探していた。